

2-O-5

意味のある文脈を重視した初等英語教育のための教員養成プログラムの開発

協本聡美

2020 年度から予定されている小学校英語教育の早期化、教科化に向け、養成課程の整備は急務である。養成課程での英語教育やその指導法科目のコア・カリキュラムも提示されている。児童期にふさわしい授業実践ができる指導力を育成するためには、知識やスキルはもちろん、養成課程の学生が持つ英語学習の概念の再構築が必要であるという立場から、一連の研究は、キエラン・イーガンの想像力を触発する教育法を基盤とした小学校英語教育指導法の開発を目指している。

イーガンは、「授業の本質は意味に関わることでなければならない」と述べ、教育における学習者の感情や想像力を重視し、教育の目的は認知的道具 (cognitive tools: CTs) の発達であるとする。イーガンの imaginative approach (IA) を理論的基盤とした英語教育法の授業の有効性はこれまでの研究である程度明らかになっている。本研究では、これまでに得られた知見を反映した授業における学生の取組みをデータとし、今後の授業のための改善点を探ることを目的とした。

具体的には、英語絵本を教材として、話しことばに関わる CTs に着目しながら学習者の感情に働きかける英語活動を学生に作成させ、模擬授業形式で発表させた。作成過程のグループディスカッション、模擬授業、模擬授業のレフレクション、授業後のインタビューを、学生の CTs の理解、模擬授業での CTs の使用の仕方に着目して分析し、英語絵本の教材としての有効性や今後の授業に向けた改善点を明らかにした。

2-O-6

口腔の健康が健康寿命の延伸に与える影響に関する研究 (第一報)
口腔機能評価と栄養状態の関連についての検討

足立了平

原 久美子 上原弘美 福田昌代 金久弥生 御代出三津子 澤田美佐緒 高藤真理
大川直美 畑山千賀子 破魔幸枝 東 麻夢可 濱 清華 神吉利美 中津沙矢佳 小牧実央

【緒言】フレイルは、低栄養、筋肉量の減少 (サルコペニア) および社会参加への意欲低下などによる全身の虚弱な状態を指し、このような予備力の低下した高齢者が容易に寝たきりや死へと移行することから要介護の前駆状態と捉えられている。フレイルを予防することが要介護への道を遅らせ健康寿命の延伸につながると考えられるため、早期発見のためのセルフチェック項目や簡易テストが用意されている。さらに、フレイル予防のキーワードとして「オーラル・フレイル (口腔の虚弱)」が用いられるようになった。これは、フレイルやサルコペニアに至る前段階として「喫食に関わる口腔の問題」が存在するという考えから、多くの歯が抜け落ち咬合が崩壊した結果、口腔周囲の筋力低下や唾液分泌量の減少など口腔機能が低下した状態を指している。摂食・咀嚼・嚥下などの機能低下は低栄養を惹起すると考えられるため、口腔機能の維持は健康寿命にとって重要なキーワードといえる。今回、ときわ病院の入院患者を対象に口腔内環境を評価し栄養状態に与える影響について検討した。【対象と方法】2016 年 4 月～2017 年 3 月における新規入院患者 1434 人のうち、同意が得られアセスメントが可能であった 1176 人を対象として、残存歯数などの口腔機能を表す指標と血清アルブミン値との関連を検討した。【結果と考察】残存歯数などの口腔内環境とアルブミンには相関が認められ、栄養状態との関連性が示唆された。